

インド・ナショナリスト穏健派のイギリス帝国観—D.ナオロジの場合

はじめに—帝国支配と「協力者」階層

なぜ、「協力者」階層と帝国との関係を論じるのか？

- ・ 現実の 19-20 世紀における帝国支配のメカニズム
特に第一次大戦以降の、アジア・ナショナリズムの勃興期の帝国支配
- ・ 「脱植民地化」(decolonization)の在り方
イギリス帝国・コモンウェルスで目立つ「権力移譲型」脱植民地化
現地人エリート層の主体性・独自性→→帝国の利用
- ・ 独立後のガヴァナンス、国際関係と統治エリート層

インドの場合—国民会議派の形成・権力移譲—とりわけ穏健派の存在

(ex) Dadabhai Naoroji, M.G. Ranade and Gopal Krishna Gokhale

1. イギリスのインド支配とインド・ナショナリズム—19 世紀末

インド政庁の経済政策をめぐる論争の展開と「富の流出」論

- (1) The debates about the import duties of cotton textiles and the countervailing excise in India in the late nineteenth century. ←←自由貿易帝国主義論
- (2) The fiscal and financial policies of the Government of India, especially about the exchange rate of Indian Rupee against sterling and 'Home Charge' transfer.
- (3) The formation of **the Indian National Congress (1885)** and the rise of Indian nationalism.

インド国民会議結成(1885 年)以前の本国に対する自己主張—東インド協会 (1855 年)
等と本国・自由党関係者との関連・つながり

2. 「インドのグランド・オールド・マン」 D. Naoroji (1825-1917)

(1)本国自由党下院議員としてのナオロジ(1892-95)

インドの軍事費の過重な負担を問題にする→1894 年 8 月の議会決議→→95 年.6 月
「インド財政管理に関する王立委員会」(通称：ウェルビー委員会)による調査開始
ナオロジもメンバーとして任命される。

(2)1900 年 4 月・最終報告書と「少数派報告」の提出

少数派報告におけるナオロジのインド統治批判—富の流出とインド人大衆の貧困

- ・ 大規模な経費節減を！
- ・ 上級官職のインド人化、統治経費の英印による折半、インド軍海外派兵経費の拒否

(3) *Poverty and Un-British Rule in India* (1901)の出版 (1900年)

「現行の統治制度は、インド人にとって破滅的で独裁的であり、イギリスにとっては非イギリス的で自滅的である」➡植民地エリートによるイギリス支配の良識・理念の主張

- ・ 厳粛な誓約の「忠実で良心的な履行」を！
- ・ 「イギリスの最高支配権のもとでの自治」‘self-government under British paramountcy’、真のイギリス市民権(=帝国臣民 imperial subjects)の実現を！
- ・ 帝国内での植民地統治機構への参与、軍事力の管理、本国議会への代表派遣
➡➡アイルランドと同等の地位を要求する。
- ・ イギリス帝国の存在自体を自明のことと考える。

3. 比較帝国論に向けて

(1) インド・ナショナリズムの中での位置:

過激派の出現、戦間期以降のガンディー、独立期(脱植民地化)におけるネルー

(2) 他のアジアのナショナリズム指導者層との比較:

西洋式の近代英語教育を受けた植民地エリート: リー・クアンユー、ジンナー

植民地支配批判と価値観の受容、近代主義の受容と利用⇔⇔その両義性

(3) (国際) 公共財の提供と利用・活用

《参考文献》

R.P. Masani (with a Foreword by Mahatma Gandhi), *Dadabhai Naoroji: The Grand old Man of India* (London, 1939).

Speeches of Dadabhai Naoroji (Bombay, n.d.)

Dadabhai Naoroji, *Poverty and Un-British Rule in India* (London, 1901).

秋田 茂「植民地エリートの帝国意識とその克服—ナオロジとガンディーの場合」木畑洋一編『大英帝国と帝国意識—支配の深層を探る—』(ミネルヴァ書房、1998年)

秋田 茂「イギリス帝国史研究と地域史の対話」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会) No.179/180 合併号 (2005年)

リー・クアンユー (小牧利寿訳)『リー・クアンユー回想録』(上下)(日本経済新聞社、2000年)